

標準治療こそ最先端です!

よくあるがんの勘違い

がんについて学ぶのはほとんどが自身や身内ががんになった後だ。体や心の不調があれば情報はなかなか頭に入らないが、基礎知識を得られないと最適な治療を選べなかったり、治療が遅れたりしかねない。がんの電話相談に当たる担当者が挙げる「よくある勘違い」について、専門家に解説してもらった。

がんに関するよくある勘違い

- 標準治療より期待できる先端医療がある? → 標準治療こそ最先端。根拠が確かな最新の研究反映し、他の治療法較べられて勝ち残った。え得る最良の治療。
- 緩和治療はもう治る見込みがない? → がん治療の最初から取り組む考え方が。痛い、つらい、食べれないなどを改善する。療にも好影響を生む。
- 治験の薬や治療法は高額? → 多くの患者に研究に。してもらうために。る安く、交通費など。費が出る場合も。
- がんになったのは生活が悪かったせい? → がんの約6割は原因。気を付けていても発。るもの。
- 仕事を辞めなければいけない? → 慌てて辞めるのは。早。抗がん剤や放射線。治療も可能。仕事。立支援の制度も整。ある。

※がん情報サイト「オンコロ」と勝侯範之日本医大教授への取材から作成

「標準ではなくて最新、最先端の治療はないかとよく聞かれる。標準が『並』『普通』と誤解されている」と中山さんは言う。日本医大武蔵小杉病院腫瘍内科の勝侯範之教授は、「それは大きな誤解。標準治療こそが最先端だ」と力説する。

☑ 緩和は治療の最初から

がん情報サイト「オンコロ」は、がんの最新研究や新薬、治療法の情報をウェブサイト提供し、電話相談に応じている。3年以上、電話を受けてきた中山裕樹さんによると、最も多い勘違いは学会の診療ガイドラインなどが推奨する「標準治療」のことだとい

▽チャンピオン

一方で「根拠の不確かな治療を勧めるウェブサイトには『痛くない、つらくない治療を受けた』という患者の気持ちにつけ込む表現が多く、患者を惑わせる」と中山さんは嘆く。治験をしようと思わず、保険が利かない高額な自由診

告もある。今後は治療開始と同時に緩和が必要だとする考え方が主流。痛みやつらさを和らげて療養生活の質を保つことが重視される」と解説する。早くから緩和ケアに取り組むと、患者の生存率が高まるとの研究報告もある。

勝侯さんは標準治療を「厳しいトーナメントを勝ち抜いたチャンピオン」に例える。新薬とどちらが効果が高いか、常に挑戦が繰り返され、勝ち残ったものが残っている。それが標準治療だ。薬の量や組み合わせ、いつ投与するかも、最新の研究で刻々改められる。

中山さんによると「緩和治療にも勘違いが多いという。『緩和治療を勧められたら終末期なのか』という相談だ。勝侯さんは「治療できなくなったから緩和、ではない。今は治療開始と同時に緩和が必要だとする考え方が主流。痛みやつらさを和らげて療養生活の質を保つことが重視される」と解説する。早くから緩和ケアに取り組むと、患者の生存率が高まるとの研究報告もある。

▽生活の質を保つ

中山さんによると、ほかに「仕事を辞めなければいけないか」などの相談も多い。勝侯さんによると、いずれも正しくない。安全性や効果を確かめる治療では、多くの患者に参加してもらうためむろしく安く、交通費など協力費が支給されることも。

▽治験は高くない

中山さんによると、ほかに「薬の治験はお金がかかるのでは」「がんになったのは生活習慣が悪かったためか」

がんになった原因についても「生活習慣に起因するとみられるのは30〜40%。遺伝的素因によるものが5〜10%、残り約6割は原因がはっきりせず、健康に気遣って人間ドックを定期的に受けていたとしてもがんになるときはなると話す。

仕事を慌てて辞めるのも早計。抗がん剤治療や放射線治療は通院でも可能になってきた。仕事との両立支援の制度も整いつつあり、がん相談窓口を通じてソーシャルワーカーや社会保険労務士から適切な助言が受けられるという。

(共同) 由藤庸二郎



勝侯範之日本医大教授(同大提供)